

義理観念の一背景

——（１）カミ優先意識の流れ——

久保田 勉

日本心性の特質を示すもののひとつとして、義理なる観念をとりあげることができる。われわれは、義理を直観的に、自他ともに了解しあったものとして用いていることが多いのであるが、そのゆえにか、学問的対象として体系的に述べられることが、あまりなかったようである。

義理は、人の交わりに務むべき道、交誼といわれ、人の践み行なうべき正しい道すじという道徳一般から、契約関係にまたがる、幅広い意味をもち、¹⁾ その観念は、時代的個性と、これと反映しあう人間関係の様態のなかに、また体面・恥の意識などをも加味融合しながら、その形式と内容とを今日まで伝えてきた。しかし、その間、一貫して日本の社会関係を規制する一定の生活規範を意味し、それはまた外面的制裁によって支えられてきた事実を否定しえない。

われわれは、つねに、歴史的社会的現実との対応のなかで、義理観念の生成、その機能と型態、拘束性の強度、現代的観念の生成、などの諸問題について *éthologique* な立場から、さまざまな視点を通じて、考察の目を向けていく予定であるが、本稿においては、まず、日本人の「カミ」優先的意識、「カミ」への迎合的心情と義理観念とのかかわりあいを予想することによって、義理観念の底に流れているものの一面をのぞき観たいと思う。

義理は、主として特定の間柄にある人々のあいだの、ある特定の感情・思

1) 狭義には、「当時者が平等の関係にある場合のポトラッチ的・契約的社会意識」
桜井庄太郎『日本封建社会意識論』「自分のうけた恩恵に等しい数量だけ返せばよく、また時間的にも限られている負目」ベネディクト『菊と刀』。

惟・行動の様式である。これは一定の社会関係を前提とする。義理観念は、社会型態に規定されつつ、それを規定している特定の社会関係を直接の社会的基盤として生成するものであろうが、一般的にみれば、近世封建社会という、構造上いわば「タテ」の「格」づけ組織における特異な人間関係のなかに集中的に表現されたものと考えられている。しかし、この観念も、日本思想のもつ特殊性を負っているのである。つまり、ある時代的個性によって支えられてきた思想が、新しい時代的個性を反映した思想に、その席をゆずったとしても、それがそのまま退化消滅することなく、なお、依然として根強く生きつづけているという、いうなれば思想の重層的な性格を帯びているのである。現代的な義理観念のなかに、古代的・中世的・近世的思考型態の命脈が流れているのである。われわれが持っている現代的義理観念は、かくて、前代の余燼であり、かつ時代的個性によって変容したもの的一部分であるから、当代の観念から義理一般を把握することには無理があり、むしろ集中的に表現された時点に考察の対象を求めるのが妥当である。しかし、封建的に規定された上下関係のなかに集中的に表象されたといっても、日本思想史における重層的な性格から推してみるに、上下関係のいかなる形式や内容が封建的個性を示すものであるか、いかなるものがそこに義理の花を咲かしたものであるか、ということになると、にわかには把握し難い。

御覧候へこれに物の具一領長刀一えだ。又あれに馬をも一匹つないで持ちて候。これは唯今にもあれ鎌倉に御大事あらば。ちぎれたりともこの具足取って投げかけ。錆びたりとも長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り。一番に著到につき。

さて合戦の始らば

敵大勢ありとて。一番に破って入り思う敵と寄りあい、打ちあいて死なんこの身の………¹⁾

と決意する佐野源左衛門尉常世にみる献身的奉公の念、また………坂東武者の習、大將軍の前にては、親死、子討るとも顧みず、弥が上に重りて戦ふと

1) 『謡曲大観』佐成謙太郎、第四卷「鉢木」。

ぞ聞く¹⁾ ………没我的投入，絶対服従，あるいは恩と愛に対する負目，といったものは，すでに古代の心性のなかにも，われわれの見出しうるところである。

海ゆかば 水浸く屍 山行かば 草生す屍 大君の 辺にこそ死なめ
顧みはせじ………… (4094)

大君の 命かしこみ 磯に触り 海原渡る 父母を置きて (4328)

今日よりは 顧みなくて 大君の 醜の御楯と 出で立つ我は (4373)²⁾
と歌いあげた古代人の，私情を捨てた心情には，いわゆる封建社会における武人の心情と相通じる魂が含まれているように思う。このような，上位者に対する献身，没我的投入観念の基調は，社会型態学的解釈によっても，解決されるかも知れぬが，この観念の底流には，古代心性における「カミ」の観念が消長して存在しているものと思う。

上代人の諸観念のうち，もっとも重要であったのは「カミ」の観念であった。「カミ」という語の語源に関しては，学者間でいろいろに論議されてきたが，いまだに定説がない。「カミ」は上，長上 髪をも意味しうるし，政治的支配者も，のちにみるように，「カミ」といわれている。すべて，空間的階層的に上位に在るものが「カミ」であろう。和辻博士は「絶対者をノエーマ的に把握した意味での神ではなく，ノエーシス的な絶対者がおのれを現はしてくる特殊な通路としての神である」³⁾といわれ，別の箇所では，カミガミの「神聖性は常に背後から与へられる。さうしてその背後には究極的な神があるわけではない。即ち背後にある無限に深い者の媒介者としてのみ，神々は神々となるのである。これは云ひかへれば，神々は祀られると共に常に自ら祀る神である，と云うに外ならない」「神々の根源は決して神として有るものにはならないところの，即ち神聖なる『無』である。……（中略）……

1) 『保元物語』

2) 『万葉集』からの引用は，すべて『日本古典文学大系』によった。番号は，例によって国歌番号である。

3) 和辻哲郎『日本倫理思想史』上巻，p. 84

絶対者を無限に流動する神聖性の母胎としてあくまでも無限定に留めたところに、上代信仰の素直な、私のない、天真の大きさがある」¹⁾と観ておられる。ここに、全的に、「カミ」を概念づけることは、もちろん不可能であるが、それは、西洋における **God** にみるような、原理的唯一者でもなく、また、中国人が思惟した「神」に似てはいるが、存在する世界を異にするものであった。総じて、さしあたり何らかの「権威」「威力」に対して、漠然と「カミ」を観たとして大過あるまい。

上代人において、「カミ」は一定の生活領域をもつ社会集団（イエからクニに至るまで）のそれぞれの守護神であり、マツリはその守護を願う行事であった。「カミ」をマツル者は、当該集団の代表者であり、集団守護の神託を乞いうる有資格者であったし、ツミとケガレをミソギ・ハラウ者であった。このマツリゴトは、もちろん支配者階級の利益のために起ったのではなく、むしろ支配という関係はなく、始めに存在したのは統率の事実だけである。「原始的集団においては、その生活の安全のために祭事が要求せられた。力強い祭司の出現は、集団の生活を安全にしたのみならず、更にその集団を内より力づけ活発ならしめた。祭司の権威の高まると共に集団は大となり、その大集団の威力が神秘的な威力として感ぜられる」²⁾に至り、統率は民衆の生活の内的必然的要求であった。³⁾

祭司の権威の高まりいくことは、集団のさまざまなツミやケガレを排除して、民衆の福祉を増進することであった。ツミ・ケガレはミソギ・ハライにより、祭司により呪術的に行ないえたのであるから、たとえば、個人的信仰における絶対者への帰依にみられるような、深刻な道徳的内省とか、ザンゲといったようなものはなく、むしろ、集団の福祉を利己的に祈願することからされていたであろう。カミガミ相剋の伝承は、この間の事情を物語ってい

1) 和辻哲郎『尊皇思想とその伝統』。岩波講座『倫理学』第1冊, p. 30

2) 和辻哲郎『日本精神史研究』p. 3

3) 『隋書倭国伝』（岩波文庫）に「是に於いて、国人共に立てて王となす」とあり、『後漢書倭伝』『魏志倭人伝』にもそれぞれ「共に一女子を立てて王と為す」「共に立てて王と為す」とある。

る。このような対決のきびしさを欠いだ、見方に依れば、迎合的心情がそのままに、いわゆる「カミ」に対して、その優先性・優位性を認める思惟・感情・行動のパターンを持つ傾向につながるのである。

ともあれ、民衆の福祉への願望が（それ自身としては自覚されずして）権威や統率関係の設定として自覚せられたのであった。

古代集団は、祭祀的統一として成立したのであるが、それは「カミ」へのマツリを共にする精神的共同体であり、これら祭祀的統一体としての集団は、さらに上位の祭祀的統一体に属していた。かかる団体を統一するものは権力ではなく、「全体性の権威」¹⁾であった。

かくて、「カミ」は集団という集合の表象である。表象されたものとしての「カミ」が持つ神聖性は、望ましき *desirabilité* の対象であると同時に、畏敬の対象であり、したがって義務性 *obligation* の発露するところでもある。ゆえに、「カミ」は拘束的存在であるともいえよう。

社会型態の推移は、時代的個性と相沿うて、隠身の権威としての「カミ」が集団の全体性の権威・威力としての、顕身の祭祀的統一者・天皇への迎合的とさえ思える敬称として用いられている。

王は 神にし座せば 天雲の 五百重が 下に 隠り給ひぬ (205)

大君は 神にし座せば 天雲の 雷の上に 庵らせるかも (235)

皇は 神にし座せば 真木の立つ 荒山中に 海を成すかも (241)

さて、かかる「カミ」としての天皇は、権威の所在としての、「オホヤケ」（公）の意味をも持つ。古語において、「オホヤケ」は、もと大家（オオヤケ）の義であり、皇室を意味している。これに対して、一般の国民は小家（コヤケ）とよばれ、皇室は本家・宗家と観念されているのである。もともと、日本心情のなかには、*public* とか *öffentlich* といったような観念はなかったのであり、日本人においては、「公」共性とは、皇室に対する関係

1) 和辻哲郎『日本倫理想史』上巻, p. 86

2) E. Durkheim, *Les règles de la méthode sociologique*, 1919, p.6.

E, Durkheim, *Sociologie et philosophie*, 1924, p.43.

にほかならなかったのである。¹⁾

すなわち、日本書紀・推古天皇十二年の、いわゆる聖徳太子憲法十五条に「背私向公、是臣之道矣。……非同則以私妨公」（傍点筆者）とあるが、「公」はそれ自体、中国産であっても、この条文の訓読は、平安朝初期の宇多・醍醐天皇時代の作とされている岩崎本日本書紀が「ワタクシニソムキ、オホヤケニユク云々」として訓読していることから推して、その読みと意味は、すでに奈良時代に日本化されたものと考えうる。しかしまた、孝徳天皇・大化二年八月十四日の詔には「……及臣連等、所有品部、宣悉皆罷、為国家民」（傍点筆者）とあって、「為国家民」を「オホヤケノオホミタカラトスベシ」と訓読していることから察するに、「国家」もまた「オオヤケ」である。ひいては、「公共的なもの」、「人倫」をも意味しているのである。なお、当時の政治型態は、祭政一致を原則としていることから考えて、「オホヤケ」は国家という組織集団であり、朝廷という上層の官僚組織であり、天皇というそれらの代表的権威の所在を意味していたと思われる。このことについては、「……後の宮、三条大宮のほどに、四丁にて、厳めしき宮あり。公、修理職に課せ給ひて、左大辨を督して……」²⁾ また「……高麗人と文をつくりかはしければ、公きこしめして……」³⁾ 「一国を治むるに、おほやけ事またくなどして、わたくしの財数おほくたくはへふ」⁴⁾ などの用法に見えるように、平安朝文献においても、数多くうかがいところである。さらに、「……さはれ、上に御覧ぜさせんといひて……」⁵⁾ に見えるように、「上」と表現されることもある。「公」は「帝」でも「上」である。

以上おおまかにみてきたのであるが、時代的推移のなかにあって、権威・威力としての「カミ」の観念は、現実の人間関係（集団）のうちにあって「上位者」、人間関係そのものとして「公」共的なもの、「人倫」として、

1) 中村元『東洋人の思惟方法』第二部、p. 142

2) 『宇津保物語』藤原の君。

3) 『宇津保物語』としかげ。

4) 『宇津保物語』藤原の君。

5) 『宇津保物語』忠こそ。

その時どきにおいて観念されているのを観うる。これらの「カミ」としての天皇、国家、朝廷、公共、そしてまた人倫そのものを指した「オホヤケ」は、それらの（またそれらのなかにあって）下の階層における上位者・上位層のなかにも、同じく「オオヤケ」という観念を植えてつけている。『古事談』、第四、勇士の項にみえる平将門より太政大臣に捧げる書面に「……将門少年之日。奉名符太政大臣殿下。数十年之間。我致勤公之誠。然相国摂政之世。……」とあるが、文中に見える「オオヤケ」がそうであろうし、『新編追加』などに見られる「公領」（将軍家領）、私領（御家人領）の呼称、また江戸時代に下って、幕府・将軍家を「公儀」と称した事実のなかに、さらに今日、官公衛庁等に対し「おかミ」なる語を残存させて用いている事実の中にもうかがい知ることができる。

このように「カミ」の観念は「オホヤケ」の観念と重複し、それは組織集団の代表者を意味しつつ、組織集団そのもの、その機構などに対する下位者からの意識をも含んでいるのである。さらに、「オホヤケ」はのちにみるように、「イエ」の観念とも重なり、加えて、今日に至っては、世間・世の中という非組織集団一般をも漠然と指すごとくに転じている。

ところで、さきの将門の文面にある「奉名符」なる字句に注意しなければならぬ。ここに出てくる「名」には氏族制度のもつ意味や、「イエ」観念の消長をも、くわしく考えあわさなければならないが、いまはとにかく「名」を捧げることの意味のなかに、さきにのべてきた「カミ」なるものへの迎合性と「カミ」優先の意識が流れていることを指摘しておきたい。これが、ひいては同族（あるいはイエ）意識と平行しつつ、体面意識、恥の意識として、義理観念とかかわり、その内容をも形成していくものと思われる。

義理の花咲く、いわゆる封建社会の代表的階層であった武士の特徴である身分的主従関係は、その源流を班田制崩壊のあとにくる荘園の成立、共同体（族）の武力化の進行に伴った、貴族的階層と実力的階層のからみあいのうちに求めることができる。ここに観取される寄進・托身は、土地ぐるみ同

族となることを意味していた。将門が「名」を捧げたのは托身の儀礼であり、それは氏名や長の名をいただくこと、自分の顔を見せる見参、盃をたまり酒を飲み交わすことなどを含めて家礼（ケライ）を致す儀であり、同族となることを意味している。

この「名」は、古代人の感覚においては、とくに、自己の身体を表示するものであり、同名なれば同氏族、または同血縁であり、相手の「名」を知れば、その身をうるほどのものであった。

隼人の 名に負う夜声 いちしろく わか名は告りつ 妻と持ませ
(2497)

わが背子に 直に逢はばこそ 名は立ため 言の通に 何そ其ゆゑ
(2524)

妹が名も わが名も立たば 惜しみこそ 布士の高嶺の 燃えつつ渡れ
(2667)

荒熊の 住むとう山の 師齒迫山 責めて問うとも 汝が名は告らじ
(2696)

住吉の 敷津の浦の 名告藻の 名は告りてしを 逢はなくもあやし
(3076)

かれらにとって「名」は単なる記号でも観念でもなく、まさに実体そのもの、生命の部分と思惟されたのであろう。したがって、名を問うことの意味は、絶大であったと思われる。

箆もよ み箆持ち 掘串もよ み掘串持ちこの岳に 采採ます児 家聞
かな 告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて われこそ居れし
きなべて われこそ座せ われにこそは 告らさめ 家をも名をも
(1)

「ノル」は、「イフ」「ツグ」「カタル」「マラス」「トフ」「タヅヌ」などという言葉とちがい、『万葉集』においては、用例が限定されている傾向が見受けられる。たいていの場合、それは人名に関しているし、なにか壮重な発言をする場合に限定して用いられているようである。このことは、古代

人の「名」に対する異常な感覚を有していたことを証すひとつの手掛りとも考えられる。フレイザーが紹介した、¹⁾ オーストラリアの部族における、「普通の名」と「極秘の名」をもつ習俗にも似て、「名」を容易には他人に明かさぬタブーさえが、そこに感じられはしないだろうか。この「名」の習俗があればこそ、次のような訴えの声がほとぼしり出たものであろう。

汝と吾を 人そ離くなる いで吾君 人の中言 聞きこすなゆめ (660)
垣穂なす 人言聞きて わが背子が 情たゆたひ 逢はぬこのころ
(713)

垣なほす 人の横言 繁みかも 逢はぬ 日数多く 月の経ぬらむ
(1793)

逢はむとは 千遍思えど あり通う 人目を多み 恋ひそ居る (3104)
人言の 繁くしあらば 君もわれも 絶えむといひて 逢ひしものかも
(3110)

……君が名いはば 色に出でて 人知りぬべみ あしひきの 山より
出づる 月待つと 人にはいひて 君待つわれを (3276)

人目といい、人言・中言・横言というのは、他者なる世間を指し、人倫という公共を指している。個人の背後に迫りくる社会的拘束性という見えざる権威への畏れの表現である。「畏」れは、うらはらにおいて「望」ましきの性質を有するものであった。公共なる人言への迎合的態度はその例であろう。

隠沿の 下に恋ふれば 飽き足らず 人に語りつ 忌むべきものを
(2719)

思ふにし 余りにしかば 為方を無み われは言ひてき 忌むべきものを (2947)

さて、「名」の捧呈（家礼による上位とのつながり）は、かかる氏族時代の感覚が儀礼化したものであろうが、酒を掬み交わし、食事をともにすることによって上位者につながり、同血縁となり、同じ氏の「カミ」に仕えて同

1) フレイザー『金枝篇』第3巻。

族となる、という古い感覚は、以後の新しい各時代の、上層権威へのかかわりあいのなかに、ひとつの原理的様相をもって現われており、さまざまな変容をもちつつも、この「カミ」優先の意識、それへの迎合的心情は、一つの流れとして、歴史のなかに出てくるのである。

天慶の乱。平忠常の乱に登場する主役たちが、いかに中央の形式的権威を乞い求めたことか。藤原氏へ名符を捧げたり、その姓をもつことの許しを乞うた史実。平清盛が、その娘を摂政家の藤原基実へ嫁さしめた同族結合への心情のなかに、また朝廷接近による形式的権威への迎合性に、源平相剋の流れのなかに目立つ「院宣」取り付けによる「名分」樹立への動き。頼朝が藤原氏を討つにしても、義経を討つにしても、「院宣」を要請したこと。足利尊氏が、元弘三年（1333年）鎌倉幕府打倒の業を為した折にも、後醍醐天皇の「名」において反幕府戦を展開したこと。これらは、武力所有者がとった政治的安定のために採った方策であろうが、——また、実質的権力への欲望であったとしても、なお、その背後にか、底流にか、「カミ」優先意識が絶無であったとは言い切れない——なにゆえに、かかる手段を選ばねば、安定をうることができなかったのか。この点に、われわれは注目しなければならない。数えればきりのつかぬほどに、「カミ」の優位・優先の意識と、それへの迎合的心情が、各時代それぞれ一様ではなかったにしても、原理的といえるほどに、ひとつの型となって現われてきていることを見逃せない。なお、二・三の引例を用いて、このことを強調しておきたい。

織田信長は、当時すでに実力なき將軍であった義昭という名目的権威を奉じて入洛し、「幕府」再興という権威による征服をもくろんだが、のち信長が義昭を討ったとき（1573年）、源氏の足利氏を倒したという「名分」をつくるため平氏を称している。実は、それまで藤原氏を名乗っていたのである。越前織田荘にいたという程度の、在地の荘官級であった信長は、生長するにおよんで、家格を重んじ、それを誇示せんとして都合の良い家系を作ったといわれるし、さらに天皇家によって位階を得、永禄十年（1567年）正親町天皇の綸旨をえて全国大名支配の名目をえている。徳川家にしても、足利氏と

同じ源氏の系図を買い入れたといわれているが、このことの根本的心情は、源氏が皇胤の臣籍であること、徳川家が天皇の臣下であることの下位劣等の意識のなせるわざであろうかと思われる。古代の有力諸家が、皇別・神別の家系を誇示し、「カミ」なる権威をもつ「イエ」に、その出自を求めた風習と同一のものである。

「イエ」という「オオヤケ」を重視する思惟型態は、すでに述べてきたように、日本人の実践を有力に支配している。大伴家持は

…………大伴の 遠つ神祖 その名をば 大来目主と 負い持ちて 仕え
し官 海行かば 水浸く屍………… (4097)

といい、また

大伴の 遠つ神祖の 奥津城は しるく標立て 人の知るべく (4096)
と歌っている。なお、中世の武士は、合戦にのぞんで、まず家系を名乗る習わしを持っていた。「音にも聞きつらん、目にもみよ。桓武天皇の苗裔、高望王より十一代、王氏をいでて遠からず、三浦大助義明が孫、和田小次郎義茂、生年十七歳、我とおもはんものは大將も郎党も寄って組めとぞ呼ばはりける¹⁾」。

以上、いささかくどい述べ方をしてきたが、「名」を重んずる背後に、「カミ」なる権威・威力としての「オオヤケ」と、集団・集合としての「オオヤケ」をみることができるし、家礼によるつながりのなかに、同族意識を通じての、同じくタテに連なりヨコに連なる「オオヤケ」をみうるのである。「格」式の高まりを願い、普遍者への接近を秘めるかのごとき心情、「公」式、「公」認におもねるこれらの事実すべての根底に、一脈流れているのが、「カミ」優先の意識と迎合的心情であるといえよう。これはまた、日本人のもつ人倫重視傾向の一面としてみることもできる。日本道德史の重層的性格の底辺にある、ひとつの主要なる流れであると考えうる。封建的に規定された「上下関係」「平等関係」のなかに生じる義理観念の、おもな型態をとり出して、つぎにその底流にあるものを探ってみたい。＜未完＞

1) 『源平盛衰記』二十一。